

【子どもの観察例:サッシャ】（男児 1972年8月11日生;3歳2ヶ月から9ヶ月間の記録）

サッシャは1975年の9月の初めにプレイグループに参加した。最初の頃、彼は私の注意を引くことはなかった。大概彼は独りであちこちを静かにうろついていただけだったから・・・。

・1975/10/10・・・サッシャは机の上にあった『びっくり箱 Jack-in-a-box』に興味を示した。何ごとかをブツブツ呟いていたが、Jack人形の頭を箱の中に押し込んだ。そしてそれを箱から踊り出させた。これを何度か繰り返した。彼はJackが箱から飛び出すのを眺めるや、その瞬間、顔面にチック(痙攣)が認められた。少々妙な具合に一人クスクス笑いをしている。おそらくペニスの感覚を想起されたのだろう。

ミルク・サークルの時間、彼はおやつとして配られたオレンジの一切れを受け取るのを拒む。<サッシャは代わりに pee-pee(チンポコ)が欲しい・・・>と言って、一人ぎこちなくニタニタ笑いをしている。[冗談なのか本気なのか、誰にも分からない。子どもの誰も気に留めず、彼は無視された。]

・1975/10/24・・・遊びの最中、偶発的に、サッシャはジェマの頭にぶつけてしまう。明らかに痛かったには違いない、だが妙なニタニタ笑いをしながら、すぐさま身近にあった木製の荷車に乗り込んで、辺りにいた他の子らの車に向い、あっちこちと猛烈な勢いで突っ込んでゆく。執拗に何度も・・・衝突の音を派手にかなでながら、いっそう(性的)興奮をエスカレートさせる。[車の衝突の遊びは、象徴的に‘両親の性交’場面となる。そこに‘お邪魔虫’の彼が暴力的に侵入するということであろう。]

・1975/11/21・・・サッシャは砂箱の砂と戯れていた。手で砂を少しずつ掬い取っている。そして<爆弾がぶっとんだ、bomb-fire だ・・・>と言って、顔に大きなニタニタ笑いを浮かべた。[この場合、彼の手も‘爆弾’もペニスを象徴している。つまりは‘悪いペニス bad-penis’というわけ。加虐性を色濃く帯びている。ひどく感覚が鋭敏 sensuous で、それが身体的感覚で極めて官能的 sensual である点に問題を孕んでいそうだ。しかも彼の遊びは誰にも相手されていないから、性的 sexual とも呼べない。サッシャという存在は一人ひたすら浮いている。]

・1975/11/28・・・サッシャは砂箱で遊んでいた。<砂浜を切ってやる・・・>と言いながら、ペストリーに使うナイフを振り上げている。ジョーがそれを耳にし、不快と感じた。そこでサッシャのからだを押し、<砂浜を切り刻んだりしちゃダメだよ・・・>と牽制した。

[実に不思議なことに、子どもはある時期まで、この世のすべての事象・物体を象徴的に捉える。すなわち「母親おっぱい」か「父親ペニス」かのいずれかに繋げ絡めて把握するのである。サッシャの「ナイフで砂浜を切り刻む」というのがなぜジョーに不快と感じられたのかは、その《象徴言語の読み解き》が故にある。つまり、それが「母親おっぱい＝砂浜」と「父親ペニス＝ナイフ」の‘性交 intercourse’、それも bad-intercourse だったからだ。性的興奮がサッシャ、そして忌避感がジョー、その違いは興味深い。]

このしばらく後で、サッシャとジョーとが箒を巡って奪い合いをやっている。なぜ彼らが箒にこだわって、自分のものにしようとするのか皆目分からない。ただ私が床を掃いていたので、彼らもそうしようと興味を持ったのかも知れない。ところが、私がいまにも彼らの喧嘩が眼に余るので、それを止めようとして、箒を取り上げてしまう。おかしなことに、その後でも、2人は床の上でまだ必死になって取っ組み合いを続けていた。[おそらく‘箒’は、「父親ペニス」の良い象徴。私が手にしていたせいで尚更に奪い合いとなったのだろう。だが本来の「父親ペニス」への希求心も無意味に頓挫し、逸れてしまう。]

サッシャはくぼく、絵を描こう・・・>と言って、自分でペインティングのコーナーへ向った。だが、絵の具で自分の手をベタベタに汚しただけであった。絵の具の感触に刺戟されたようで、そのベタベタになった両手をさらにグジャグジャにこすり合わせていた。[やはり触感的な感覚 sensuous に耽溺してしまう。そこ止まりで、さらに創造性へと水路づげができない。この腰砕けの感じが惜しい!]

彼は小さな積み木でタワーを造ろうとして遊んでいた。私が傍らで手助けしていた。彼は落ち着きなく、破壊的ともいえた。積み木のタワーが高くなってゆくの待たず、すぐにも蹴散らしてしまう。彼のなかの攻撃欲が抑制しきれずに外へ漏れて、溢れ出たように感じられた。[積み木の塔は「父親ペニス」の象徴。魅惑的であるがゆえに羨望の的でもあり、また脅威でもあろう。それは憧れと敵意といった矛盾した感情を抱かせられ、彼にとっては実に厄介なシロモノであるに違いない。こうした両価的葛藤にサッシャが絶えず苛まされていることは明らかだ。]

サッシュは私に愛想のいい笑顔で近づいてきて、<チズコ、ぼく、何したらいいかな？>と訊く。私に遊び相手になってほしいとせがんでいると察したが、私が一緒に何しようとする暇もなく、突如として彼は私に跳び掛かり、叩くやら、引っ搔くやらの攻撃をし始めた。その果てに、私が攻撃を防ごうとしていたが防ぎきれず、私の眼鏡を手で打ち落とす。[あまりにも予期せぬ衝動的な爆発であった。特にどういっきっかけがあつたわけでもない。彼の内側に巢食うところの何かである。不気味とも思えた。]

彼はウエンディ・ハウスの中にいた。なぜだかそこに置かれてあつた‘電話’に猛烈な攻撃をしている。そして躁的で上機嫌な笑いを張り上げる。赤ちゃん人形が入浴しているバス・タブを指差しながら、<あそこに poo-poo(うんち)があるんだよ・・・>と言う。そしていっそう興奮を煽られたかのようにゲタゲタ笑いながら、<ベッドにも poo-poo(うんち)があるぞ・・・>と言う。[‘電話’そしてその他のどれもこれもが両親間の性交の証しの象徴的な意味。それ故に性的刺戟となつて、サッシャは興奮をそそられた。]

私がサッシャに絵の具でお絵描きをするようにと励ます。彼が一応その作業し終えたあと、私のところに来て、<うんち poo-poo を持ってきてあげたよ。この画用紙にうんちが付いてるんだ・・・>と言う。彼の顔には悪戯っぽい笑いが浮かんでいた。[この年齢の大概の子どもらの場合、「絵の具＝うんち」といった象徴的等式はもはや放棄されている。サッシャの場合、肛門愛的固着としかいいようがないレベルだ。排泄物(糞便・尿)を攻撃の‘武器’とするのが肛門愛の常套手段だ。]

アニヤが舞台の上に一人腰掛けている。たまたま私が彼女のすぐ近くに立っていた。サッシャが私の周りをうろうろしていた。〈ねえ、チズコ、何して遊ぼうか・・・〉と私をいかにも独り占めせんとするよかのように誘う。アニヤが靴を脱いでいたので、私がそれを履かせてやる。するとサッシャがアニヤに向って、〈おまえ、うんち(poo-poo)だ！〉と挑発的なことばを投げかけ、ニタニタと笑う。〔この頃、ジョーとアニヤとは親密な遊び友だちの関係になっていたわけだが、どうやらアニヤはサッシャには惹かれられない。サッシャもアニヤに惹かれられない。(アニヤはサッシャよりも3ヶ月年下である。)2人はなにやら‘似た者同士’の印象があるのだが、なぜか互いに斥け合うばかり。それぞれの理由で・・・興味深い。〕

・1975/12/05・・・彼は砂箱の砂をシャベルで掘っていた。‘庭仕事’だということだ。バケツを砂でいっぱいにして、〈埋めろ、埋めろ・・・〉と言っている。顔には悪戯っぽいニタニタ笑いを浮かべている。サッシャが傍らのアルタフにとっても親しそうに〈砂のお城と一緒につくらない、そうしようよね〉と誘った。〔サッシャの誘いにアルタフは乗らなかったようだ。サッシャの意図するところが敏感に警戒されている。アルタフにしてみれば、正直なところ何やら薄気味が悪いといった印象だろう。〕

サッシャはたまたま見つけたアイロンに躁的 manic な興奮を表わした。アイロンの下側(お尻)から水が出てくると眩きながら、〈オシッコ、オシッコ wee-wee だあ・・・〉と大笑いをする。そして彼はそれをトイレへ持ち運ぶ。そしてすぐに戻ってくるや、〈床にオシッコしちゃったよ・・・〉と眩き、興奮している。

シルポーが積み木遊びをしていて、一つずつ積み木を積んでゆく。倒れはしないかとおっかなびつくりで怖がる。そこにサッシャが横合いから執拗に邪魔立てする。シルポーが怒り、サッシャに反撃する。そしてついに自分がこしらえた積み木の建物を、サッシャが倒すまえに、壊してしまう。〔こんなふうに、自己の破壊性を他の子どもらに感染してゆく。またそれが愉快でたまらないわけで、サッシャはプレイグループで或る種‘愉快犯’になってゆこうとしている。〕

とても愛想のいい笑みで私に近寄ってきて、〈チズコ、叩くよ。眼鏡を吹っ飛ばしてしまうからね・・・〉と言う。そして実際に言ったとおりのことを彼は行動した。〔眼鏡が目の敵にされている！疎外感かな。〕

サッシャは木製の荷車に乗っていた。あちこち駆けずり回っていた。それから三輪車に乗っていたシモーヌへ向かい、わざとぶつかっていった。シモーヌは怒って、サッシャに〈あっちへ行け！〉と怒鳴った。サッシャはちょっと怖気づいて、その場を歩み去る。しかし直に新たな‘餌食’を見つける。三輪車に乗っていたジョーである。サッシャは荷車を彼の方へ向けて突っかってゆく。

〔プレイリーダーのジャッキーが私に報告してくれた。サッシュのお母さんから聞いたのだそうだ。サッシュはプレイグループに来るまで、お家では決して感情(emotion)を表すことがなかったんだとか。それが今や、とんでもなく過剰になっているわね、ということだった。ちょっと呆れ顔である。まったくくだ！〕

・1976/01/16・・・ジョーの母親が当番で居た。サッシャがドウでソーセージを作るのを傍らで手伝っていた。すると、ジョーがこれといった理由もなしに、サッシャの手を叩いたりつねったりする。サッシャは哀れっぽく泣く。そして私を見上げて、〈ねえ、助けて！〉というサインを送る。ひどく女々しい。そこで私がくどうして、ジョーにそうしないでねって言わないの〉と言う。しばらく後もジョーは絶えずサッシャに辛く当たってる。おそらく自分の母親を他の子らと共有することの緊張故だろうが、どうもサッシャがそのジョーの鬱憤晴らしの矢面に立たされているらしい。いつもやや劣勢ぎみのジョーが発奮したのかしら。ジョーの母親の手前、サッシャがいい子ぶってるのが気に喰わないのかも・・・それも一理ある！

サッシャは私を自分専属の遊び相手に決めたいみたいで、始終つきまとう。しつこく監視している。もし私が彼から去ろうとする動きを見せると、すぐに不安そうになる。〈チズコ、ここに居て。コーヒーの茶碗はここに置いてね。ぼくが何か作ってあげるから・・・〉とやら愛想する。ドウを伸ばして、その上にクッキーを作るときの容器を使って、‘キリンさん’の型を取る。そして私にそれを見せる。私がコーヒー茶碗を台所へ持ってゆき、サッシャのところに戻ってきてみると、なんとサッシャの手元にあった彼のドウの作品はナイフでメチャクチャに切り傷が付いていた。[‘キリンさん’も「父親ペニス」の象徴。それ故アンビヴァレンスに苛まされ、やがて攻撃性の火が噴く。いくら遊びが建設的になってきたものの、まだまだだ！]

サッシャはレゴでタワーを作っていた。〈ぼく、うんと高いタワーを作るんだ。天井に届くほどにだよ・・・〉と愉快そうに私に笑顔した。そこにジョーがやってきて、又もやサッシャをつねった。サッシャはいかにも惨めっぽく、ぐずぐずと泣き出した。そこで私がく泣いちゃうって変ねえ、ジョーよりもサッシャの方が背丈は大きいんだから、仕返ししたって負けないはずなのにね〉と言うと、彼はすぐさま生まれただけだという彼の赤ちゃんの弟の話をする。〈すっごく大きい赤ちゃんなんだよ。9ポンドもあるんだから・・・〉と、いかにも自分には勝ち目はないと言わんばかりだ。その事実には圧倒されている！それから彼は話題を変えた。お家にヨークシャテリアを飼っているんだそう。そのサイズはとっても小さくて、まるで彼の靴下に入ってしまうぐらいなんだとか！[この話の意図がよく掴めない。が、確かなことはサッシャの世界は「弱肉強食の世界」なんだろう。喰うか喰われるか。彼自身が‘犠牲’となることも大いにあり得るわけで・・・。]

ミルクサークルの時間、サッシャは私のお隣の席に座っていた。それがどういう理由もなし、突如として私に襲い掛かった。私の手を猛然と叩く。なんとか彼を落ち着かせてから、私が彼の手を指して、〈これは、いけないnaughtyお手手ね〉と言うと、またまたカンシャク玉を破裂させて、〈違うよ、ぼくじゃない。チズコがいけないnaughtyんだ・・・〉と彼は言い返し、さらに私への攻撃を再開した。

サッシャは、ダンとジェームズの仲良し2人組みがそれぞれ手に持っていたおもちゃのミニ・カーを奪い取ろうとしたことで、彼らと間に悶着を起こした。私がサッシャを押しとどめる。彼は焦れて、〈ねえ、ぼくにも何か見つけてよ・・・〉と躍起になって頼み込む。[ダンとジェームズはいつもおもちゃのミニ・カーを手にしているのがサッシャには羨ましくて妬ましくてならない。それが口唇愛的な欲求を充たすからに違いない。この場合のミニ・カーは「母親おっぱい&父親ペニス＝乳首」の象徴であろうから。赤ん坊の弟が

いるという点ではサッシャもジェームズも家庭の事情は似たりよったり…。本来は「同病相憐れむ」みたいなものがあったもよさそうなのだが…。]……ミルクサークルの時間、サッシャがミルクを貰いに席を立ったとき、お隣のジェームズが自分の両足をサッシャの椅子の上にデンと載せる。意図的な嫌がらせか、顔つきは悪戯っぽく笑っている。[どっちもどっちだが、互いに鬱憤晴らしをしてるようだ。つまり、日頃の赤ん坊の弟への敵対心を互いの身に‘転移’し合うといった攻撃性の応酬というわけ。]

・1976/01/23・私が玄関口に現れると、彼はとても嬉しそうに出迎えて挨拶をしたが、どうも専制的。いちいち私を自分の支配下に置きたがる。<ここに座ってね>と、私に告げ、それからもう一個椅子を持ってきて坐り、<ぼく、ここに坐るのが嬉しい。ぼく、チズコのお隣に坐るのが嬉しいの>と言う。彼はしばしば私に<ぼく、(あなたに)こうして欲しいの、ああして欲しいの>とやら注文する。例えば、他の子どもらがビニール製のトンネルに潜り込んでゆくの熱心に見ていた。彼は私に、<ねえ、先に行つてよ。ぼく、後から付いて行くから…>と言う。それをしたくてたまらない様子だが、どうも今ひとつおっかなびつくりで躊躇している。そこで彼に自分一人でも大丈夫と言ってやると、しまいにはその通りにできた。[遊びの中に「トンネル＝母胎 inside」を巡る‘悪夢’を持ち込まずに済んでいる！どうやら彼の中で‘脱情動化’が遅々たる歩みながらも進んでいるのだろう。つまり、遊びが遊びになっている！]

サッシャが私ばかりに引っ付いていてうろろうろして、他の子どもらと交わらない。そこで彼にフェイという女の子と一緒に遊んではどうかと試みる。すると、彼が返答するに、<ぼくはあなたのことが好きなんだ。フェイなんかよりもずっと好きなんだから…>と言う。こんなふう私への愛着 attachment を告白する。そして依然として私から離れようとしなない。[常時私を「楯」にしている。他の子どもを攻撃するにもまた攻撃される場合にも重宝というわけ。それは確かではある。サッシャはなかなかの‘策士’で、賢いともいえた。実際、プレーキの利かない彼には、私が‘プレーキ役’として彼を常時監視している必要性があったのだから…。]

ミルクサークルの時間、彼は私のお隣の席に坐って、ご機嫌である。<ほらね、あなたのお隣にぼく坐るって言ってたでしょ？>と言って、私を熱烈に強く抱きしめる。しかし直にそれがどうやら攻撃的な気配に変わる。この時間、いつもと違って珍しく彼は皆と一緒に活動に専念できた。結構反応は悪くなかった。……おやつに‘スナック棒’がそれぞれに一個ずつ与えられた。サッシャは自分の取り分は食べてしまった。もっと欲しい。しかしハリエツタは<もう充分、もらったわよね>とサッシャを軽く諷める。だから何も貰えずじまい。それで彼は私が手にしていた‘スナック棒’に襲い掛かり、<ぼくがこれを持ってあげる…そんでもって壊しちゃう…>と言う。そしてほんとうに両の手で握りつぶしてしまい、すぐさまそれを自分の口の中へと押し込んだ、そしてムシャムシャ食べてしまう。やはり策士である！

庭に出て遊んでいた。サッシャは石やらレンガやらを集め出した。<ぼく、これでね…木を切り倒すところだよ…>と言う。そして木にそれらを叩き付けた。どういう空想か、取り敢えず覇気は感じられた。

サッシャは、他の子どもらが自分に近づいて乱暴をしいさないかと警戒して、依然として私にしがみついている。〈ぼくの手を握っていて欲しいの…〉と、彼の手の指を私の方へ伸ばす。彼は殊の外ジョーを怖れている。彼が自分を叩きにこないかと思っている。私の眼にはそんなふうにも見えないのだが…。〔ジョーは小柄に見えるが、彼らはほぼ同じ年齢である。およそ二人は体力的には互角なのだろうが、ジョーの方がサッシャよりも確かに男の子っぽい。場慣れしているし、成熟している。つまり覇気という点からして、サッシャに勝ち目は無い。この‘ライヴァル登場’というのはサッシャにとって悪くない現実だ。〕

・1976/03/12… そして或る日、私が一週間の休みを経て出掛けると、玄関口でシモーヌから熱烈な歓迎の抱擁を受けた。そこにサッシャがやって来た。ドウで何かを作っていたらしく、それを頻りに見せたがって、私をその机へと連れていった。そして‘お誕生日のケーキ’を作ることを思いついた。そしてたまたまそこにあった‘ローラー’を手にしてそのドウのケーキの真ん中に突き刺した。それは一応ケーキの口ウソクというわけだ。そして「Happy・バースディ」の歌を歌い始めた。それからお誕生日のケーキをもっと作ろうと意欲を燃やした。ところがそうしてる間に突如、〈おまえを叩きのめしてやる…〉と言うと、私に猛烈に襲い掛かってきた。つねったり引っ掻いたり…。それをなんとか押しとどめたが。直にどういっかけがあつたわけもなし、またまた私への怒りを爆発させた。このとき彼はやり過ぎた。床にあった積み木を掴むや、私目掛けて投げようとしたとき、ハリエツタが間に入り、なんとか彼の注意を逸らすことで、私を彼からの攻撃から救った。〔私の「不在」が、即ち両親間の性交、そして妊娠、そして次の子の誕生といったシュミレーションとなり、彼のこころの導火線に火が付き、瞬時に爆発を起こしたのだろう。彼が敵愾心を煽られるのも理由があるわけだが。そうだとすると一人よがりの空想だから、ことが厄介だ。彼の敵愾心は徐々に「父親ペニス」に的が絞られ、それが集中砲火を浴びる。例えば、誕生日のケーキの口ウソクだが…。そして「父親ペニス」には彼の攻撃欲が付着されるにつれ、ますます破壊的な悪しき象徴として摂り込まれる気配が濃厚。こころの悪循環が、サッシャの不運なところだろう。〕

しばらく経って庭先でサッシャがビニールのフラフープを手にして、私に近づいた。その輪の中に私を捕まえようとした。それがうまく行ったとき、つまりフラフープの中に私が嵌ったのを目にした途端、すかさずそれを目撃したシモーヌは、それを私への敵意と怒りを爆発させる好機としてとらえる。〈そいつの尻を、ひっぱたいてやれ！〉としきりにサッシャを煽動し、さらには彼女自身が率先して、〈おまえは、けしからんやつだー！〉と詰（なじ）りながら、必死の形相で私を叩きにかかる。サッシャもこの機会を見逃すはずもない。シモーヌに加担し、私への情け容赦のない、猛烈な攻撃を再び開始した。〔なるほど、彼らの間には結託するだけの理由がある。「母胎」への羨望的な自慰空想を分かち合っている！〕

・1976/03/26… サッシャが私にまわりつく。何か遊びを見つけてよと言う。そこでたまたま机の上にあったジグソーパズルを指して、これなんかどうかしらと答えると、とくに異議はないようだ。それで2人で椅子に腰掛けた。最初、私は完成図の絵をサッシャに見せた。そこにはママの豚さんと赤ん坊の豚さんと彼らのお家とが描かれてあつた。そこで私が一応すべてのピースをボードから外して机の上に置いた。それからそれらをまたボードの上に元通りに並べるようにと彼に指示をした。彼は一応それを了解したようだ

った。それで一つのピースを取り上げて、ボードの上に置いた。しかしながら、彼は自分が手にしたピースの絵柄をよく見もしない。どうやら完成図などというのもまったく彼の念頭にないことが判明した。それですべてのジグソーパズルのピースはボードの上に意味もなく積み上げられてゆくばかりであった。ピース同士の関連性もない、全体として統合性もない、ただグチャグチャなのである。彼の認識力の低さに私は些か唖然とした。彼の注意力はしばしば簡単に逸れてしまう。私の導きにもフォローし得ない。それでこれは無理と判断し、もっと別の簡単でやさしいジグソーパズルを選び、サッシャにやらせてみた。だが結果は同じであり、彼はまったくどうしようもないということがわかった。

〔要するに、まだまだ彼の世界は、原初的シンボル要素「母親おっぱい」及び「父親ペニス」が支配的。現世世界の事象・物体のすべて何もかもがそこへ収斂されてゆく。そこに情動レベルで尚も膠着し、〈距離〉を持たないまま。従って、眼前のそれはそのものとして認知されることはない。かくして‘知る’という行為には至らないわけだ。〕

・1976/05/07・サッシャは庭にいた。私の方に駆けてきて、〈ジョーがぼくのこと叩くんだ・・〉と助けを求めた。それは恰も私が彼の‘避難所’みたいで、私の背に隠れてジョーの追跡から庇ってもらおうとしているようだった。果たしてジョーがその気なのかどうかは私にはよく分からなかったが、とにかくジョーはそれ以上、サッシャを追掛けてはこなかった。ところが、そのしばらく後になって、私はサッシャがジョーに手を挙げて叩いているのを認めた。それはまるでジョーに対して挑発的というか、それでまた彼がサッシャを追掛けてくれるのを狙ってでもいるかのようだった。サッシャの本音はジョーに相手になってもらいたがっている！彼の泥沼化している「自慰空想」の捌け口として、ジョーとの関係づけが必要なのだろう。傍迷惑な話だが・・。しかしながら、おそらくどっちもどっちなのだろう・・。

〔ジョーは執拗にサッシャを目の仇にする。そのサッシャは近頃誕生したばかりの弟の存在にひどく脅かされている。ジョーと彼はほぼ同じ年齢なのだが、ジョーは小柄ながら負けん気が強いので、サッシャとしては怖いし怯えざるを得ない。つまり、サッシャにとっては「ジョー＝赤ん坊の弟」になる。一方、ジョーは近頃妹の誕生で落ち着かない。サッシャは、すぐにメロメロ泣くし、ジョーにしてみれば実に目障りでうざったい奴なのだ。つまり、ジョーにとって「サッシャ＝赤ん坊の妹」なのだ。それぞれの熾烈な内的葛藤が互いに相手に‘転移’している。お互いがそうした「相互転移」のアクティング・アウト(acting-out)の格好の相手なのだ。だから2人の間では衝突やら小競り合いが絶えない。しょっちゅう2人でしつこく追いかけて回している。かくして互いが互いに癒着した、離れがたい関係なのである！〕

・1976/05/14・ニールは私をウエンディ・ハウスへと導く。〈ここに坐ってね。お茶はいかが？〉と言う。赤ちゃんを入浴させる。〈ぼくがママなんだよ〉と言う。赤ちゃんを寝かせる。サッシャが邪魔しにくる。ニールは怒る。そして大急ぎでハウスの入り口に椅子を置き、バリケードのつもり。〈これで誰も中に入ってくれないね〉と言う。〔ニールは弟の誕生を迎えたばかり・・。サッシャはあっちでもこっちでも‘お邪魔虫’！だが、プレイグループでそこそこ自分の出番があるというのが満更でもなさそうだ。〕

ウエンディ・ハウスの中でサッシャは私と2人きりというわけで、周りには誰もいなかったもので、私に対していっそう親密感を抱いたもようだ。私の側に寄り添い、私の顔を見上げながら、<ねえ、ぼくの方が背が高い？>と訊く。それは大真面目な問い掛けであった。彼は私の背丈と比べっこしていた。彼は私と同じぐらい背があると思いたがっていたが、どうやら不確かなのだった。それで私がちょっと膝を折り、<そうね、同じみたいだね>と返答する。彼は喜色満面となり、これと同じ質疑応答を再び繰り返した。そしてとても満足げであった。結局のところ自分はそう大して小さくもないと思ったのだろう。この間、いつものサッシャならば、私への熱烈な感情が時として暴発し、私への身体的な攻撃へと転換されるのがしばしばなのだが、そうしたことも珍しいことだが無くて済んだ。[子どもが抱く矮小感は辛い。それで小児万能感 infantile omnipotence が躁的防衛というのも辛辣過ぎはしないか。やはり子どもにとって小さいということは時として辛いことだと大人が認めてあげることも必要に思われる。]

ジョーが攻撃的な振る舞いに出る。主にターゲットはサッシャである。砂箱で遊んでいた彼を執拗に叩く。彼の母親が見かねて、注意すると、<サッシャがぼくを叩いたんだもの>と口答えする。この彼の自己弁護について信憑性は一応あるといえよう。

このしばらく後で、サッシャがジャッキーの膝の上に座り、ジグソーパズルに挑戦しているのを認めた。それはダブル・デッカー（ロンドンの乗り合いバス）の絵であった。今度はそこそこ興味を示して、集中しているようだった。ジャッキーは、サッシャがこのジグソーパズルを完成させるのに、特に彼に手を貸すことも必要なかった。彼は出来たのだ！それで皆誰しも驚いたのである。[ダブル・デッカーだって、見様によっては「たかさんの‘inner-child’を抱えた母胎」の象徴にもなろう。彼の羨望的攻撃から免れたというのが奇跡だ！何か変化の兆しか。]

庭先で彼はいつもの‘木を刈り倒す’という遊びをジョーと一緒にやっていた。彼は私に、<ねえ、手伝ってくれる？>と言って、石を手渡して寄越した。[「父親ペニス」との格闘か。それが‘胸を借りる’という意味なら悪くなかろう。大いにぶつかってゆくのもいい。サッシャはようやく‘エディプス’になろうとしている！現実の父親との関係について一切情報はないのだが。こうした場合、母親は息子の味方してもよからう。‘エディプス葛藤’をうまく乗り越えさせるのだ。]

・1976/05/21・・・ニールが積み木遊びをしているのを私が手伝っていた。それでうまくタワーが出来たところで、彼は小さなおもちゃの車をその積み木のタワーの上に這わせて昇らせていった。それが彼を至極喜ばせた。そのとき、サッシャがすぐ傍らでその成り行きを眺めていたが、近づいてきて、手で積み木を崩しに掛かった。実際積み木のタワーは幾らか壊れてしまった。サッシャの中に強烈な嫉妬心を感じたので、ここでニールと仲良く一緒に積み木を積んでみたらどうかとサッシャに励ました。だが、彼はそこにただじっと立ちすくんでいるだけ。そして積み木のタワーがいくらか形の出来た頃合に、彼はまたも手を出して、そのタワーを突き崩す。私が彼を諫めて止めたが、何度か彼は執拗に破壊を繰り返した。彼がついに歩み去ったあと、私がニールに<サッシャはほんと‘とんでもない怪物’なんだから・・・>と言う

と、ニールは勿論それに同意した。が、すぐさま何やら彼も‘とんでもない怪物’になりたいと思っただけで、積み木のタワーを蹴散らし、突き崩してしまった。彼の顔はいかにも嬉しげであった。〔攻撃性は子どもの間ですぐさま感染する。創造する力よりも破壊する力の方がずっと早く活力を感じるわけだ。そして誰しも子どもの場合、ほんのちょっとしたきっかけが攻撃欲の引き金となる。その意味でサッシャという存在は‘不穏な火種’ということにもなる。表立って彼と関わりを持つとするとする者、あるいは持つとしないでもむしろ彼を避ける者、子どもたちもさまざまだが・・・〕

庭でジェームズが私に近寄り、ビニールのフラフープ(輪)で私の捕らえようとした。そして実際私が捕らえられたのを見たとき、サッシャがすぐさま私の側に近づいてきて、猛々しく興奮を募らせていった。私を‘囚人’に見立て、さらなる身体的な攻撃を加えていった。ジェームズはそこまで過激ではない。サッシャはジェームズに便乗しただけだが、より過激。攻撃欲が専有欲とごっちゃとなるので厄介至極だ。

サッシャとジョーとがお互いを追いかっこする。ぐるぐると輪を描いて、どちらもくすくす笑って、珍しく一緒に愉しげである。

・1976/05/28・・・サッシャは私を机へと導く。<こっち来て。ここに坐って>と、とても意欲的であり、かつちょっと支配的でもある。ドウで彼のいうところの‘ケーキ’を作った。それを私にくこれは、チズゴにだよ>と言って手渡ししてくれる。そこで私がそれを食べる真似をする。それが彼をととても喜ばせた。さらにサッシャは私を食べさせるというゲームを続行した。大いに嬉しがり満足げであった。

ミルクサークルの時間、それぞれ子どもらはおやつとして幾粒かの干し葡萄をもらった。サッシャは私が貰った手元の干し葡萄からもう1個余分にもらいたがった。それで私があげたものから、彼はとても喜んだ。少し後に、さらに幾粒か干し葡萄が追加され配られたのだが、それで今度は彼が私に一個くれた。とても嬉しげであった。おそらく私に対して気前のいい態度を示したことで満足であったのだろう。顔にはご機嫌で友好的な笑みがあった。

〔サッシャにとって誰かに食べさせるのが快感になるのは、「母親同一視」があるからか。やれやれといったところ。こうしてうまく‘飼い馴らされて tamed’ ゆくといいいのだが・・・〕

サッシャはジョーに対して‘触りっこ’して騒いでいる。ちょっと挑発的でもあった。ジョーがすぐさまそれに反応し、サッシャを叩き返した。そこには苛立ちと敵意があった。サッシャは私のところに走ってきて、ジョーの追掛けの楯として使った。それから私を真ん中にして、彼らの間で追っかけごっこが展開した。どちらもくすくす笑いをしている。それから直に2人一緒になっていくらか親しげに歩み去る。

庭先で、サッシャとジョーとが一緒になにやら真剣な面持ちで‘木を伐り取る’作業をやっている。これは近頃彼らが熱中している遊びである。ジョーがここで、彼の父親がやっているのを見たという電動式

のこぎりについて話す。それで2人で電動式のこぎりのブンブンいう騒がしい音を立て、木を伐るふりをする。こうした熱中の真っ只中、サッシャが私に一個の積み木を手渡し、<この木を伐るの、手伝ってくれる？>と頼む。

・1976/06/11・・ジョーと何人かの他の子らがスライド・ハウスの天辺に陣取り、ロケット遊びをしている。彼らは‘乗客’なんだそうだ。ニールがやって来て、<ぼく、乗ってもいいですか？>と訊くと、ジョーが<はい、どうぞ>と言う。ニールは<サンキュー>と答える。サッシャはその遊びには加わってはいなかったが、たまたま眼に留め、どうやら刺戟を受けたく、私のところにやってきて、<ぼく、ロケットなんだよ。サヨナラだよ>と言って、スライド・ハウスのほうへダッシュした。そこにたどり着くと、私のもとへまた引き返してきて、<ハロー>と言う。これを繰り返した。〔無邪気な遊びだが、どうやらサッシャが愛の対象との〈距離の取り方〉を学んでいるとしたら、結構すごいことだ。〈距離〉に耐えられるようになってきている！「さよなら good-bye！」が「コンニチワ Hello！」に繋がる、サッシャの心の内でそんな保証が信じられつつあるのだろう。これも、Mrs. マーサ・ハリスのいうところの「the experience of togetherness」の効果であろうか。サッシャと一緒にいてやれたことが嬉しい、と私も思い始めた。〕

ミルクサークルの時間、サッシャはまた落ち着かなくなる。ジョーと押し合い・へしあいを折り折りにする。彼らは隣り合わせの席に坐っていた。そしてしばしばお隣に座っていた私に助けを求める。<ジョーがぼくのこと、叩いたんだ>と言いながら・・。ところが、ジョーの注意が他の子に少しでも奪われるとその隙に付け込み、サッシャはジョーを引っ叩くのであった。いかにも悪意を含んだ顔つきである。

庭には丸太が置いてある。サッシャがジョー、ギディ、ニールそれにアニヤと一緒にいる。彼らはその丸太に乗かって、‘ボード’だと騒いでいる。一方、パトリックはテーブルを一人占めしてぼくの‘船’だといっている。さらには、彼らと一緒に木を伐ることに熱中する。ギディが<パパは電動式ののこぎりを持ってよ>と自慢する。大きな木になにやら切った傷跡が一つ認められた！本気なのがいい。

・1976/06/18・・サッシャはジグソーパズルの腕前がぐんと上がった。彼は、かなり難易度の高いものにも辛抱強く取りくんだ。それをハリエッタも認め、彼を褒めた。

ミルクサークルの時間、皆がそれぞれの椅子に腰掛け、輪になって坐っている。サッシャは、私のちょうど真向かいの席に坐った。彼は立ち上がり、私目掛けて駆け寄り、両手で私を抱きすくめ、私に熱烈にキスをした。そこで私が彼に自分の席に着くようにと促す。そうするが、またまた彼は同じことを繰り返した。彼が私を抱きすくめるさまがあまりにも強烈で、私はちょっと恐れをなして、怯んだほどであった！

〔この〈距離化〉の試みがなかなか心憎い。「母親転移」としてみると、改めて〈距離〉がサッシャにとってどれほど耐え難いものか、その心の痛みの程が分かる！〕

男の子らが幾人か庭にいた。木の枝を欲しが。それで地面を掘ろうということだ。木の枝を奪い合い、ジョーとサッシャがまたまた争っている。〔木の枝は「父親ペニス」の象徴。やはりどちらの関心もそちらに動いているのは確かなようだ。彼らの争いも、「父親ペニス」の性的能力 potency の摂り込みだとしたら、それも微笑ましい！〕

・1976/06/25・・サッシャは私と一緒に居てくれと頻りに頼む。つまりは他の子どもらと交わることを怖がっている。実際のところ、彼は容易に厄介者・嫌われ者になりかねない。すぐに興奮しやすく、暴れるし、他の子が遊んでいるものを横取りし邪魔するし、彼らに向かってくウンチ、ウンチ poo-poo・・！>とやら囃したてくすくす笑いをしたりするからなのだ。私を必要としたわけは、それで他の子らとの間で小競り合いが起きたり、あるいは敵愾心を煽られた彼らから反撃される場合に備えて、私に「楯」にしたいということになる。〔敵から己れをどう防御するかがサッシャの思案のしどころだとしたら、己れの傷つきやすさをいくらか自覚してきたのだろう。そうした彼を擁護するため‘仲介役’として私自身も彼に試されているわけだ。これも「母親転移」ではあるが・・。〕

庭で男の子らが丸い大木を航海する船に見立てて乗っかっている。サッシャもその中に混じっている。なにやらそれらしき音を立てている。それでシルポーがサッシャを咎め、牽制する。<そこは運転手の席じゃないぞ>と・・。〔シルポーはサッシャより半年も年上だから、ちょっとかなわない相手なのだ。〕

他の男の子らが‘剣’を作っていた。木製のものさしで、穴があり、それを繫げネジで固定させるというわけだ。サッシャも真似して同じようなものを作ろうとした。その長さが、天井にまで届くほどに伸ばそうと意欲を見せた。

〔丸い大木も、そして‘剣’も「父親ペニス」の象徴。身の何気ないいろいろな物が「父親ペニス」として摂り込まれてゆく。それへの憧れが今や優位だ。それとの同一化は男の子らを確認たる男性としての性同一性へと誘う。ここに誇り高い自己信頼 self-reliance の根がある。〕

サッシャは、ジグソーパズルにあまり気が乗らなかった。簡単に気が散漫となり、あちこちへ逸れてしまう。誰かがたまたま通りすがった折に、一つのピースを投げつけたりもした。

庭に出て、彼はいつもの‘木を伐り倒す’遊びに熱中していた。‘電動式のこぎり’を使うふりをしたあと、彼は両手で思い切り木に立ち向かい、押した。すぐさま傍らにいたジョーが‘木を押し倒す’という遊びに加わった。それから2人でまた‘電動式のこぎり’に戻った。ジョーは、サッシャがひどい騒音を立てるので、彼に<音がひど過ぎるよ>と牽制した。その言葉に侮辱されたみたいにサッシャはカッとした。おまえなんかにゴジャゴジャ言われたくないという気持だろう。彼は、<ぼくの方が、おまえなんかより、ぐんと大きいんだぞ>と憤慨した面持ちでジョーに言う。そして興奮して、いつもの荒れ狂ったようすでジョーに殴りかかった。〔実際のところ、年上の他の大きな男の子らの存在が気になるのかも知れない。〕

・1976/07/01・・庭で、いつもの「木を押し倒す」遊びをしたあと、サッシャは他の子らと一緒に木を見上げて、風で木の葉が揺れ、舞い落ちてくるのを認め、面白がった。<ほら、見て！‘罅’が木から降りてくるよ・・>と言う。他の子らと、いつものように‘厄介者’にならずに、結構よく遊びに没頭した。

このすぐ後、サッシャはジョーと取っ組み合いをしていた。サッシャはジョーを執拗に追い回し、つねったりしてる。そこでしまいには、ジョーも我慢しきれず腹を立てる。それから激しく泣き始めた。

サッシャが机の上のドウ‘練り粉’を口の中に入れるので、止めさせた。‘ケーキ’のつもりだろうが・・。「(食べる)ふりをする」ことがどうもうまく理解していないみたいだ。

サッシャの母親がお迎えに来た。乳母車の中には弟の赤ん坊がいた。それでサッシャが私に、<赤ちゃん、すごく大きな男の子なんだよ>と不安そうなかっ悩ましげな顔つきをして言う。

・1976/07/06・・サッシャとジェイクとがスライド・ハウスの中に2人だけでいた。どうやらうまが合ったみたいだ。彼らは車のハンドルを中へ持ち込み、そこで「運転手ごっこ」をしていたもようだ。[ジェイクはサッシャよりも3ヶ月年下の男の子で、サッシャはあまり脅かされない相手のようだった。]

サッシャが三輪車に乗っていたジャスティンに向けて唾を吐く。おそらく三輪車を貸せと脅したのであろう。しかしジャスティンは、黙ったままだが、サッシャの強引さに屈することにはためらいがあった。サッシャは彼に執拗に嫌がらせをし続けた。それでジャスティンも、サッシャにどう反撃したものかと戸惑うばかりで、立ち往生したまま涙ぐみかけていた。その時サッシャは突然私がこの事態を見ていることに気づいた。彼らから物理的にはかなりの距離があったのだが・・。すると私が何か言うまえに、彼はジャスティンへの嫌がらせをそれ以上するのは止め、歩み去ったのである。

何か他の遊びの最中、サッシャはごく自発的に<ぼく、シルポーが好きだ>と言う。この際、シルポーは辺りにはいなかったのだが・・。傍らのジョーがすぐさまこれに反応し、<ぼくもだ、シルポーが好き・・>ととても感情を込めて言う。[シルポーはいわば彼らにとって‘お兄ちゃん’になるわけだ。実際7ヶ月ほど彼らより年上である。父親ではなく、身近に自分に近い同性の存在への憧れやら好感を吐露できたというのは実に進歩！いずれ‘お兄ちゃん’になって年下の誰かに慕われるという夢にもなる！]

このしばらく後で、サッシャとジョーとがシルポーが木製のピストルを作っているのに加わっていた。彼らはそんなふうと一緒にいて、なんら摩擦もないようだ。いうなれば‘友好関係’が成り立っているみたいなのだ。シルポーは男の子の中では一番年上ということもあるが、他の男の子らからも好意を寄せられているようだ。時折彼が皆を率先して遊びに導いている。そうした場合、他の子らは嬉々として彼に従う。例えば、庭で大きな木が1本横たわっていたのだが、それは‘船’だということになって、シルポーは勿論その‘船長さん’なのだが、その舵を取り、航行し始めた。そしてウインブルドンへと向うと決めた。他の

子ら(全員男の子)はウインブルドンでピクニックするのに船に乗ってゆくことに大いに興奮した。しかしながら、この愉しげな共同遊びにおいて、サッシャは乗船した一人ではあったのだが、いつもの興奮した際に彼がやりかねないことだが、しばしば他の子の背中を叩くなどした。それも思いきり叩くのだ。そこで私が見かねて、彼に叩くのはダメだと注意をしなくてはならなかった。彼の攻撃性の餌食となったのは、ジョーとパトリックであった。パトリックは半年ばかり年下で幼く、どうやらこうした他の子どもと遊び馴れていないのか、サッシャの攻撃には戸惑うばかりで、泣きそうになる。どう反撃していいものやら決断が付きかねる様子であった。「相手になること・相手させること」がまだまだだということらしい。サッシャにしても実際そうした幼い彼とは似たり寄ったりだが・・・下手に負けん気があるだけに、厄介だ。‘お兄ちゃん’には当分なれそうにないということかな。

帰宅のため、去ろうとしていた折、サッシャはなにやら悲しげで鬱々としていた。母親が彼に、ジャッキーとチズゴにサヨナラを言いなさいと促すのだが、全然反応しない。実際のところ、母親が現れる前、私はコンカー(とちの実)をサッシャのために探していたのだ。それは私が枝からコンカー(とちの実)を取って、それをシルポーに手渡してやるのをサッシャが目敏く見つけて、自分も欲しいと私に懇願したからだ。だが、残念ながらどうしてもコンカーは見つけれず、彼を諦めさせる外なかった。このことを彼の今ひとつ機嫌がよくない理由として、私が母親に語ると、サッシャの母親はくじゃあ、あちこち後でとちの木を探し回ろうね。そうしたら、コンカーを一個サッシャに見つけてあげられるかもね>と請合い、彼を励ました。実際に母親がサッシャにそうしてあげたものかどうかは分からぬが・・・[サッシャは母親にとっては‘愚図な子’なのかもしれないとふと案じられた。確かにシルポーの方は成熟した印象だから、誰もが彼を鼻屑してもおかしくない。母親からも信頼されているのだろう。私がたまたまシルポーにしかコンカーの実をあげられず、それでサッシャがシルポーに嫉妬し、傷つき、そしてそれで憂うつ depressive になったとしてもよく分かる。失恋の気分なのかな?]

・1976/07/15・・・サッシャは少し上の空で引きこもってる印象。私との接触を自分の方から求めようとしない。これは稀なこと。しかしながらすぐに他の子らに刺戟され、枯れ葉を互いに投げ合うのに加わった。きゃあきゃあと大騒ぎしながらやっていたが、ごく自然にペアーになって遊び始めた。サッシャはパトリックと組んだ。明らかに相手に汚れた枯れ葉を投げつけ、服を汚すのを目論んでいる。だがしばらくしてこの後、サッシャはジャッキーのところへ駆けてゆき、喉の痛みを訴えた。なんだかひどく惨めそうである。事実ジャッキーの膝の上でグズグズと頻りに泣きじゃくっている。そこでジャッキーが彼を室内へと誘導し、そこでお話の読み聞かせをする。そこに20分以上も留まった。[体調の不具合を訴えてゆく相手が、この場合、私ではなく、ジャッキーであったということは微妙だ。私との間に〈距離〉ができたということだ！‘失恋’の痛手を引きずっている?!「母親転移」としても興味深い。心の痛みやら自分の弱さに敏感になっている。ここらで関係づけの再調整が問われよう。相手を傷つけないような、自分も傷つかないような思慮が求められる。庇護してくれる母親或いはその代わりに誰かに寄生(パラサイト)するのではなく、彼自身が子どもらの輪に加わり、相手を相手することで、もしくは相手してもらうことで学んでゆくしかない。そうして、好かれない・選ばれないという自分の思いを相手に伝えてゆくことだろう。]

それからサッシャは庭へ舞い戻ってきた。元気になったみたいだ。ニールとパトリックとがやっつることに興味を持った。それは‘配管工’の仕事を真似っこしているのだ。地面の溝にたまっていた枯れ葉を掘り起こしていた。これを眺めていたサッシャがその溝にゴミを投げ込んだ。すぐさまニールがそれに反応し怒り、サッシャを咎めた。これがサッシャの強烈な敵愾心やら怒りを煽った。彼はニールの背中を思い切り引っ叩いた。〈けしからん naughty…〉と言いながら。〔実際、サッシャがけしからんのであったが…〕そして攻撃性をさらにエスカレートさせたため、私が彼を止めた。

折々にサッシャはジョーと小競り合いとなる。彼らどちらもがお気に入りのおもちゃの鉄砲を巡っての争いである。ジョーが負けそうになり、〈ぼくのなんだから…〉と涙声で訴えている。

それから間もなくのこと、別のことに関心が向いた。それはジェイクが室内から持ってきた一塊りのドウ（練り粉）である。サッシャはどういうわけか、そこでピクニックに出かけるということを思いつき、大いに興奮した。そうしてジェイクとサッシャは連れ立って、歩み去る。そして彼らの‘隠れ家’となるスライド・ハウスの天辺へと這い上がり、そこで2人居座った。彼らはどちらもドウの塊りを噛む仕草をしてガラガラ笑い合っていた。そうした彼らに対して他の子どもらはいい顔をしない。どこかおかしいと違和感を募らせてる。naughty（けしからん、良からぬこと）というわけだ。例えば、ニールが言う。〈あいつら、怪物だ〉と…。それでそこにやってきたシルポーにアルタフ（※）が早速ご注進に及ぶ。折りしも、なんとシルポーは西部劇にあるようなシエリフ（保安官）のバッジを胸につけていた！いかにもそれらしい‘権威’を表している。そこでシルポーは、すばやくジェイクとサッシャが手にしていたすべてのドウ（練り粉）を奪い取り、彼らを力づくでその場から追い散らしたというわけである。〔シルポーは時折攻撃性を爆発させて専制的になることもある。だが、他の子らはそれに従う素振りで敢えて誰も抵抗しない。彼は、積み木やら空箱を使って物づくりをするといった構成的な遊びに際立ってすぐれて能力がある。秩序への志向性とかバランス感覚がいいということだろう。それこそがサッシャの対極であり、従ってこの場の秩序の回復のためにもアルタフがシルポーに援助を請うたのも正解なのだ。〕

※註；後日（1976/11/26）、アルタフがごく自発的なお喋りでサッシャに言及した。そのとき、彼は砂遊びをしていた。ビルを建築しているんだとか。そこでこんな話をした。〈人々はね、昼となく夜となく一日中ずうっと働くんだよ。それは誰もビルを壊したり出来ないように、なんだよ〉と語る。さらに、〈たくさんの人が夜でも働いているんだよ。ぼくがベッドで寝ているときもね。…夜には、サッシャは寝ているとぼく思う。…彼はもうここには来ないね。新しい学校へ行ったって…〉とお喋りを続ける。〈彼が来なくなると悲しい？彼に君は仲良ししてあげたわね。サッシャは君にとっていい友達だったかしら？〉と私が尋ねると、〈うん、彼はいつもぼくのことと突くんだったもん（No, he's always pushing me）〉と返事する。それから、アルタフはコンクリートを作るといって、水と砂を混ぜ合わせる。そうした作業を路上で見たことがあるんだとか。かなり大きなビルが建つほどにたくさん勢い込んで彼はコンクリートを作った。〔おそらく誰もがサッシャには閉口していたのは確かだが、ほぼ同年齢のアルタフにとって彼は‘悪夢’のような存在として悩ませられていたようだ。厄介払いできたはずの今でも彼はサッシャを怖れている。ジョーとも

違って、大概のところ彼はサッシャとは距離を保っていたはずなのに・・。サッシャを彼が警戒するのは、アルタフもまた己れの心の内で創造か或いは破壊かを巡って揺れることがあったからであろうか。]

・1976/08/09・・サッシャはどうも他の子に対して何かこれといった理由もなしに、叩いたり、押したり、引っ掻いたりする。とても衝動的で抑制が利かない。ウエンディ・ハウスで薬缶を他の子らにバンバンぶつける。とても凶暴。しかもニタニタ笑ってる。ところがたまたま偶然誰かに背を押されたらしく、彼は床に倒れてしまう。すると、気を動転させて泣きじゃくり、＜ママー(I want Mummy)！＞と声を張り上げた。どうも不安定で落ち着かない。だが、もはや私を「楯」にはしない。一人で悶え苦しんでいる！

サッシャが、この日プレイグループに初めて訪れたエマという女の子のお隣りの席に座った。しばらくの間とても喜んでいるふうだったが、おそらくまずサッシャがちょっかいを出したに違いない、2人はお互いに叩いたり、くすぐり合ったりをやり始めた。エマは全然悪びれず、臆するふうでもまた怖がるふうでもなく、サッシャとちょっと乱暴な遊びを愉しんでいた。[彼が女の子を相手するのも、また女の子に相手してもらえたというのも珍しいことだ。他の子(それも女の子！)に好かれたい、選ばれたといった希望の兆しだといいが・・。]

【補記】

それからサッシャがどうなったか、私は知らない。だがハリエッタとジャッキーとが顔を曇らせて、ひそひそ話しているのを聞いている。どうやらサッシャの親たちが彼を規律の厳しいと専らの評判である或る学校へ送ることを決めたんだそう。大きな懸念である。もしもサッシャが悪戯でもしたら、ムチで懲らしめられるのかしら。伝統教育ならそれも大いにあり得ると、内心ヒヤツとした。

ふと思った。そう言えば、サッシャの母親は他の子らが赤ん坊に近づくことを喜ばないふうだった。シモーヌのときがそうだった。彼女はまずその接近を牽制するかのようにな＜NO！(ダメよ)＞と言ったのだ。シモーヌはただ赤ん坊を可愛がりたいたけだったのに。そして怯まず、彼女は無邪気に嬉しがって赤ん坊をあやした。赤ん坊、つまりサッシャの弟もそれを喜んだ。だが、母親は終始何ら反応しないまま、無言だった。おそらく我が子が邪陰にされるのを懼れていたのだろうが、その場(関わり)に参加も介入もしない、警戒して身を硬くしている。その彼女の心身の強張りが気にかかる。ここから容易にサッシャの混沌とした心の景色が推し量れはしないか。彼を躰けんとして容赦ない態度で「ダメ(No！)」やら「いけません naughty！」やらと連発することはあっただろうが、宥める、諭す、或いは褒めることをしないとしたら、これではサッシャが母親に抱えられているとはいえない。つまり彼の攻撃欲は水路付けされないまま場当たりに封じられ、圧殺される。そして依然としてサッシャはまるでブレーキの壊れた車のように暴走を繰り返すわけだ。そもそも彼女の態度に「YES！」がない。つまり＜いい子だったねえ You' ve been so good！＞がない。‘善’を知らなくては、ただ‘悪’の衝動に身を任すしかならなう。彼はかくして‘天邪鬼’となったというわけだ。

‘天邪鬼’といえば、シモーヌも似たようなものだった。いつ爆発するかも知れない‘マグマ’を抱えている、そんな厄介かつ恐ろしげな女の子であったのだから・・・。だが、彼女には寄り添おうと心を砕く母親がいた。<あの子の心が読めたら、どんなにいいかしら？>と憂い嘆く彼女だった。そしてシモーヌが時折に垣間見せる優しさに心底安堵し、喜んでいた。この「寄り添う能力」という観点からして、サッシャとの母親との違いは大きい。

サッシャの親たちに進路選択が間違っているとは言えない。そして実際サッシャはうまくゆけばその厳格な学校の規律に従い、「型どおり」に嵌められて、いわゆる‘適応した子ども’になるかも知れない。だがそれが何を意味するか。そんなふうにサッシャの内なる‘天邪鬼 monster’は飼い馴らされてゆくかも知れないのだが、それ以前に抑圧下で暴発した彼の攻撃性(破壊欲)は噴出し、堰き止められずに決壊し、周囲の誰彼を巻き添えに多くの被害をもたらすこともあり得る。そして力づくの抑圧の挙句に、サッシャの人間性は、まるで土石流に覆われた跡地のようにもはや影も形もなくなる。生き埋めにされるのだ。彼の生き活きたいのちは潰されるということだ。そうした‘悪夢’をハリエツタらはありありと見る思いがしたのだろう！それが尋常なる母親の‘直観’といえよう。

さらには、もしかしたら、サッシャの母親は、我が子がかつてはいい子だったのに、プレイグループに入ってから始末に終えない子どもになったとでも思ったのだろうか。だとしたら、ハリエツタらが傷つかないわけはなからう。どれほどプレイリーダーらがそして他の子らもまた、サッシャに benefit(恩恵)をもたらしたかを彼の母親が知らない、もしくは知ろうとしないとしたら、あまりにも残念だ。こうした問題は「児童サイコセラピー」に関しても同様に起こりうる。教育・心理を問わず、専門職と子どもの親との連携がうまくゆくためには、互いに共有する「フィロソフィー」が求められよう。〔註；「マーサ・ハリスの遺産」参照。〕

「適応」か、もしくは「自由か」、そのいずれを選ぶのか。イギリスでの子どもの教育論争には連綿と続く歴史がある。子どもを型に嵌める教育に断固として闘った自由教育思想家 A. S. ニールが開設した【サマーヒル学園】はまさにその歴史を体現している。そこでは今尚も、《あなたの真のカラー(color/個性)を生きてごらん！》というメッセージが根絶やしにされてはいない。元来『プレイグループ運動』とは、遡ればそこに源流をもつ、一つの水脈とも思われる。だが、その‘個性’を生きることの代償は高くつかないはずもない。おそらくそれぞれが生き永らえて、いつか己れの自由の値打ちを知ればいい。サッシャは<あなたはあなたでいいのよ！>という言葉にどこで出会うのだろう。サイコセラピーはその可能性を充たすところの一つの場であったろうが・・・。取り敢えず、プレイグループでいかにサッシャが‘厄介者’であっても、一緒に遊ぶ子どもらがいたことは救いだった。サイコセラピーが成し得ることを彼の将来の友だちに期待するのは無理だろうか。おそらくそうだろう。だが、子どもらがお互い同士どれほどのことができるものか、その彼らの‘善なる力’をぜひとも祈りたい。サッシャにとってそれこそが命綱となろう。

(2013/11/13 記)
